

心臓核医学講演会

司会の言葉

町 田 喜久雄 (埼玉医科大学総合医療センター放射線科)

横 山 光 宏 (神戸大学医学部第一内科)

新しい放射性医薬品 (RI) の開発・普及と機器の進歩により、心臓核医学は最も変貌を遂げつつある、核医学の分野の一つである。

一般臨床病院において、 ^{201}Tl -SPECT は、いまや心筋血流診断に必須の検査法として日常臨床に、定着している。これに $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -製剤が加わり、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -カウから $^{99\text{m}}\text{Tc}$ を milking し、標識すれば、24 時間いつでも心筋血流あるいは心機能検査を行うことが可能になっている。もちろんこれに対応する人員が確保された条件においてはああるが、

さらに心筋の脂肪酸代謝を知ることができる、 ^{123}I -BMIPP が普及して、より心臓疾患の診断が精細になりつつある。

心臓は自律神経の調節を密接に受けることは、古くから生理学的によく知られていたが、近年交感神経の活動状態を反映するとされる ^{123}I -MIBG シンチグラムが臨床の場に登場し、多くの知見が明らかになりつつある。今回の講演会では、この点に着目して、3 人の循環器科医による、自律神経機能の評価をテーマとして取り上げることになった。演者は、第一線の病院に勤務されている新進気鋭の方であるので、日常臨床に有益な講演が期待される。

会員に新しい心臓核医学の進む一つの道が明らかになれば幸いである。